

幼兒期の情意教育に就て (一)

大塚 喜 一

本文はもと「早教育の情意方面に就て」と題したるものであつたが、早の字が誤解され易きを思ひ斯く改題したのである。早教育が智育方面に於て稍もすれば早過ぎる教育を行はむとするはまことに遺憾なることである。

吾人は出来るだけ自然なる子供の生活に着眼して、其處に動く諸相を觀取し、其自ら然るべき當爲の方向に開發し輔導せねばならぬ。しかして斯かる教育は出来るだけ早くより始むるが至當である。無智と無計畫との中に放任せられ、又は大人の無理解なる取扱を受けたる子供は、次第に其自然なる神性を汚濁損傷曲變せしめらる。吾人の最も深く憂ふるは此點である。

神の世界より天降れる天使にも比すべき嬰兒が始めて人間界に呱呱の聲を擧げたる時、其時より親となりたる夫婦は如何にして此天使を待遇すべきであらうか、其神意に副はむとして負荷の重きに任へざらむ事を懼るは何人も然りであらう。これより來るべき數年間はその兒の一生涯の中最も大切なる時期である。此時期に於て、子供の自然の性情に副ふべき保育をなさんには核博なる智見と周到なる用意とを

要する。

本文は主として幼児の情意生活に着眼して、其教育上豫め知るを要すと思はるゝ諸相を述べたるものである。

第一章 習慣の養成

幼児教育の情意方面に就て最も平凡なる常道は子供の日日の生活上に於ける善良なる習慣の養成である。親たらむとする者は、子供の生後直ちに習慣の教育をなし得る様、豫め必要なる科學的素養を積むと共に、妊娠前より自己の日常生活を規制し、以て神聖なる天使の産れ来るを待たねばならぬ。

本章に於ては、主として C. M. Mason, — Home Education を参考として習慣形成の生理的基礎を説き以て實際の育児上に必要なる暗示を與へやう。

著者は本書の第三編「習慣は天性に十倍の力なり」(“Habit is Ten Nature”)第六節「習慣の生理學」に於て、次の如くに述べてゐる。(pp. 112—118)

「成長しつゝある組織が行動の様式を形成する」

凡そ身體の組織は、例へば筋肉組織にしても絶えず消費され、又絶えず賠償さるものである。我々が

自然的と考へてゐる歩行や眞直に立つ事等も、實は勞して教育されたる結果である。我々が意識的に習得せる字を書く事、舞踏する事等は皆苦心して習得したるものであるが、既に習得し終れば全く容易に且自然的となる。何故？ そは常に成長しつゝある組織の法則として、組織は其行動の様式を爲し得る様に形成されて行くからである。

腦が繰返しくゞて神經を通じて筋肉に同様の行爲を命令する場合にも、其行爲は下位の中樞に於て自働的となり、遂には腦の中樞を待たずして僅かの外界の刺戟にも反應し得る様になる。

斯の如くにして、子供の手の關節や筋肉はすぐにペンを持つて畫や字を書くのに必要な動作に適應する様になる。見よ、子供は彼の心によりてペンの用ひ方を學ぶのではなくして、新しく成長しつゝある筋肉それ自身が必要な行動を爲す様に形成さるゝのである。此事は、彼の香具師が常人には不可能なる諸種の藝を演ずる事を説明するものである。常人は香具師の如く、幼時の訓練によりて得たる或る特殊なる筋肉や關節の動作の能力を有しないからである。

「それ故に子供達は幼時に於て舞踏水泳等を學ばねばならぬ」

(前略) 筋肉や關節は新用法に叶ふ様になるのみならず、又或る特に養成さるゝ型に成長する。而して斯かかる成長や適應は幼時に於て最も容易に行はれる。

發音、頭部の姿勢等の如く、子供が時々刻々形成しつつある諸習慣を常に見守つてゐる事の必要なる理由は茲に存する。しやがんで歩く事、腰を曲げる事、話振りの不明瞭なる事等は、決して戯れの中に觀過さるべきではない。斯かる習慣は時々刻々、自身の一部となつて成長しつゝあるものである。何となれば、是等は彼の脊髓の質そのものに刻印さるるからである。

「道德的及精神的習慣は生理的に身體組織に刻印される」

(前略) 道德的又は精神的習慣——例へば輕卒多辯なる、又は誠實なる、又は通常の等——も亦生理的組織に其の影響を印するものである。而して習慣の偉大なる力は、恐らくは此生理的効果に由るものであらう。尙吾人がかの極めて微妙なる機關である腦が、其使用さるゝ方面に従て變化され改造さるるを思へば、此事は決して怪むに足らぬであらう。今、圖解的に此事を説明すれば、成る習熟せる一系列の思考が腦細胞の中に一つの轍の跡を作れば、それ以後は思考の流れは其道を通るのが容易となり、それ以外の道を通る事は特に意志の努力を要する事とならう。

「腦細胞の不斷の再生」

我々が愛し、憎み、考へ、感じ、尊崇する等に際しては、事實腦の或部分を働かし、其結果として其部の組織を消費する。我々のあらゆる行爲は皆腦の命令に依て爲さるゝのであるから、此機關の勞作は

如何に大なるものであらうか！ 而して此過分の消費を償はんが爲に、腦は身體に供給さるゝ養分の最良部を消費する。全身の血液の六分の一乃至五分の一は腦の消費を償はんが爲に派遣さるるから、新しき腦の組織は驚くべき速さを以て絶えず形成されてゆく。

新組織は古きものゝ通りを其儘繰返すものではない。恰も新しき筋肉の成長が如何なる新運動にも適應する如く、新しき腦細胞は成長の時を経るに従て思考の習慣を得る様に成り行くものと思はれる。但此處で「思考」と云ふは心靈のあらゆる練習を含めてである。

「人間の大腦はそれが習慣的に練習さるゝ思考の様式へと成長して行くものである」と或有名なる生理學者は云ふてゐる。

又 Dr. Carpenter の話を以て云へば、

「如何なる精神的行動の一系列にしても、それが屢々繰返さるゝ時はそれ自らを永續せしめむとするものである。それ故に、我々が前に或事情の下に於て孝へ、感じ又は爲す様に慣れたる時は、其後はそれと同様の事情の下に於ては、特に意識的に目的觀念を思ひ浮べ又は経過を豫想する等の事無くして、自動的に前と同様に孝へ、感じ、又は行はむとするものである。其理由は下の如し。

即ち一般原理として、有機體の各部分はそれが習慣的に働いてゐる様式に従て自らを形成せんとする傾向にあり、而て此傾向は神經の機官にあつては特に強い。何となれば、習慣性となるべき思考の様式

そのものが即ち其機官の機能であり、其機能が丁度其組織の絶えざる再生の條件となつてゐるからである。

(記者解——筋肉が習慣付けらるべき運動は腦又は脊髓、神經等より他律的第二次的に指導せらるゝが腦内に於て習慣を形成すべき思考は腦そのものの働である。)

意識に現はるゝ如何なる觀念であつても、それが非常に強いか又は習慣的に繰返さるゝ時は、大脳に有機的印象を残し、それに依て將來かゝる觀念を起すべき暗示に對應して同様の状態が再現せらるゝのである。

「人工的反射運動も亦獲得せらる」

腦の助けに依て我々は無數に多くの人工的反射運動を獲得する事が出来る。始の中は其動作をする爲に我々のあらゆる注意を集中せしめねばならぬが、屢々繰返す事に依て其行動は我々の組織の部分に迄食ひ込んで行つて、遂には著意する事無く又は無意識にても反應し得る様になる。

例へば、軍隊の教練は始は永き訓練の時期を要するが、練習の後は教官の聲のかゝるや直に動作する様になる。甚しきは、或歸休せる老練兵が食物を持運んでゐる際に「氣ヲ付ケ！」の聲を耳にし、突然

其手を下して食物を床上に落したといふ程である。訓練は斯く迄徹底すれば、其機制は其人の神経組織の中に織込まれるに至る。あらゆる教育の可能性は、神経系統の有する此方、即ち意識的動作を多少とも無意識的に、更に進んでは反射的に組織する力に基礎を置いてゐる(第三章参照)

それ故に規則として次の事が云はれ得る。即ち何か或る二様の精神状態が共に又は相續いて適當なる反復と明瞭さとを以て行はせられたならば、其結果として其状態の一方が起れば、我々がそれを欲すると否とに拘らず之と連絡せる今一つの状態が自動的に呼起される。

「智育及德育」

「智育の目的は、物事に關する我々の觀念をしてそれが自然に生起する様な順序と關係とに於て固き聯合を創造する事である。道德教育の目的は惡行爲の觀念を苦痛と貶謫とし固く結付け、善行爲の觀念を快感と高貴とに固く結付けてくる事である。」

註 早教育の實行者として有名なストーナー夫人 Mrs. Winifred Sakville Stonor は其著「自然教育」(Natural Education)の中の「自然の結果による罰」(Punishment through Natural Consequences)なる章に於て、其令嬢キニフレッドを嫉けるに、子供の善行惡行が原因となれる自然法の結果が然るべき様に環境を仕組まれたる有様を記せられてゐる。それは丁度此處に論せらるる理論の實

行例として適切である。(中村八郎氏譯 どうして子供を育てるか参照)

「腦細胞の獲得せる變形によりて影響せらるる性格」

兒童の腦の實際の構造は、両親が許し又は獎勵した諸習慣に依るものである。而して兒童の諸習慣は其人の性格を作り上げる。何となれば或る精神的習慣が一度作られたれば、他の習慣が之に置換へられざる限り、常に其性質を繼續せんとするものであるから。(下略)

「外界の影響」

習慣の教育の困難なるは、寧ろ新習慣の形成が子供に容易に出来る點に存する。それ故に母は、子供が召使や他の子供達の行爲を見聞する事等の外界の影響によりて生ずる悪習慣の芽を摘み取る様に常に心掛けて警戒せねばならぬ。

◇

◇

◇

以上は習慣の形成に關しての Mason 氏の所論であるが、幼兒教育上に於ける習慣の養成の重要な地位を説き明すに適切な論と思ふ。

次に、實際に論及して習慣形成の心理的原理に就て述べやう。

麻生正藏氏は其著「家庭教育の原理と實際」第四章第六節に於て「習慣形成の心理的原理」として次の四項を擧げてゐる。

一、反覆演習則。「他事を同一とすれば、一定の反應が一定の對境と頻繁に又鞏固に聯合せらるる場合には、將來該反應は該對境に應じて益々容易に營まる。」

例、起床ラッパと共に起きる事

二、無例外則。「新習慣が子供の生活の中に安固に根を下す迄は決して例外を許すな。」

此事は殊に悪習慣の打破に際して嚴守すべき所である。小生思ふに、其故は只一回の破則によりて今迄持續せる意志の勝利の優越感が破れ、反對に舊來の陋習に對する執着心を勃發するからである。實際自己の修養努力の生活を反省すれば習慣の養成及打破に於て一も例外を許さぬ事こそ強固なる意育の眼目である。

三、効果則。「對境と反應との結合は行爲者に對して満足なる結果に依つて鞏固にされ、不満足なる結果に依て薄弱にされる。」

例、子供の善行を賞讃し、惡行を貶謫すること。

四、斷決則。「善良なる新習慣を獲得し又は劣惡なる舊習慣を打破せんとするには、行爲者自身に於

て、強固にして斷乎たる最初の決心覺悟を要す。」

此第四則に依つて他の原則も自ら守らるゝであらう。

父母教師たる者は、習慣に對する必要と興味とを兒童をして痛感せしむる様、あらゆる方面から努力せよ。

正善を理想として居りながら、情慾の奴隸となり邪惡に迷ふ人間の弱點に打勝つべき力は鞏固なる實行之習慣の養成である。若し一度習慣が形成せられたなれば、對境は直に決心を喚起して實行に移り得るのである。

されば、幼時に於て善良なる習慣を養成してやがては彼の一生を通じて内在的な力で發達して行く様な性格に迄育て上げる事は、幼兒教育の重要な方面である。

此方面に就ては、次の二つの章に於て述ぶる所と關聯して考ふべきであらうと思ふ。

尙次に著者は家庭教育の實際に論及し、食事(殊に哺乳)、排便、睡眠を律動的に規則正しく幼時より習慣付ける事は、幼兒の身體のみならず精神上にも善き影響を及すと述べてゐる。其中特に注目すべきは、「是等の生理的習慣は、我々の潜在意識の上に一定の傾向を與ふるものである事は、輓近心理學の力説して教ふる所である。」との一句である。



幼兒は神の如き純眞なる性情を生れながらに持つてゐるが、生後の惡影響によりて種々の憂ふべき習慣の芽が次第に生ひ茂り、遂には其純眞なる心情をも蔽ひ隠さんとする様が見られる。茲に於て、斯かる惡習の種を亡して良習の芽を培育する事は、吾人保育者の重大なる職責となる譯である。「腦細胞の不斷の再生」なる項にて述べたる原理より考ふれば、混沌たる嬰兒期を過ぎて、諸種の情緒本能欲求等が相前後して芽生えつつある幼兒期こそは實に一生涯繼續すべき性格の出立點である。此時期に感じ、考へ、欲求し、實行する等の間に表はるる各自の個性は、彼等が一生涯社會に立つて活動すべき最初の方向を指示するものである。一幼兒の惡癖矯正に苦心して遂に成功せられたる保姆は、實に國家教育上顯著なる貢獻をせられたる方である。此保姆の努力無かりせば或は社會に害毒を流すかも知れなかつ彼が、幼兒期に其性格の方向を轉換せしめられたお蔭で如何に多くの人々に幸を與ふるであらうか。一人一人の幼兒の心の中にあなたの心の面影を宿す事こそ、實に保姆たる人に與へられたる最も尊き特權である。